

# 鶏の民俗

—— 比較民俗研究の素描 ——

任 東 權<sup>イム トン クオン</sup>※

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1. 序          | 4. 日本における鶏の民俗 |
| 2. 韓国における鶏の民俗 | 5. 結び         |
| 3. 中国における鶏の民俗 |               |

## 1. 序

鶏はいつ頃からいたものであろうか。莫然とした問題で、正確な答えは難しい。しかし、考古学では、それなりの説明をしている。

始祖鳥は、今から1億5千年ほど前の中世代ジュラ紀に生息していたと推測されているが、西ドイツのバイエルン地方から発掘された化石によると、は虫類と鳥類の中間型で、大きさは今のカラスぐらい。これがおそらく鳥の祖先だろうと言われている。

鳥は飛翔するのが特徴で、生存の必要から獲物をとるために素速く動いたり、木の枝に飛び上がったたり地上に飛び降りたりするために飛ぶことがあった。空中を飛ぶためには、羽根が丈夫で体重が軽い方が良いので、そのような機能を備える方向に進化してきたのであろう。

鳥と言っても種類が多い。多種の鳥が、いつ頃、どのような過程を経て生まれてきたのかについては、賢明な答えはない。現在、我々の周囲にいる数多くの鳥のひとつに鶏がいる。鶏は人類の生活と密接な関係にあり、長い歴史を通じて、一種の生活文化が形成されてきたことが認められる。

この小論では、韓国と文化的に授受関係にあった東北アジアとの比較民俗学の立場から鶏の民俗を考えてみることにする。

## 2. 韓国における鶏の民俗

韓国の古代神話の一類型として、卵生譚が特徴となっている。高句麗の始祖、朱蒙は河伯女が生んだ卵から生まれたし、新羅の始祖赫居世も白馬が跪いていた所にあった卵から生まれた。また、亀旨峰の六個の黄金卵から六童子が生まれ、六伽倻の王になったなど初期の王公は卵生するものとされた。

人間や白馬が卵を産むはずはない。鳥性を含んでいると考えて、哺乳類であっても卵を産み、その卵から王や偉人が生まれた解釈したのである。しかし、広い意味での鳥であって、鶏とは

※中央大学校国語国文学科教授 韓国民俗学会々長

なっていない。

文献による鶏の記録は、三国遺事に始まる。

脱解王時得金闕智 而鶏鳴於林中 乃改国号为鶏林 後世遂是新羅之号

金闕智の誕生譚であるが、鶏が林の中から鳴いて王の誕生を知らせてくれたので、国号を鶏林と改めた。今も慶州に行くと、鶏林と呼ばれる古樹林が史跡として保存されているが、「鶏が鳴いた林」という意味でこの名前と呼ばれている。新羅4代王脱解（A. D. 57～70）のことだから、西暦1世紀にはすでに、新羅には鶏がいたことになる。鶏鳴は吉兆であり、時を知らせるものであった。また、事物の始まりや終結を知らせたり、鬼を退散させる力を持っているという考え方は今も伝承されている。

三韓時代に鶏がいたことは、中国の史書にも記録されている。

- ・朝鮮有長尾鶏 尾細而長三尺（魏志東夷伝）
- ・馬韓国出細尾鶏 其尾皆五尺余（ク）
- ・韓 細尾鶏 其尾長五尺余（三国志，韓）

鶏の一種である尾長鶏が三韓時代にいた記録である。中国の史書にわざわざ記録されたのは、尾長鶏は中国にあまりおらず珍しかったためではないかと思われる。鶏林で鳴いた鶏については、別に尾に関する記録がなかったことを見ると、三韓時代には、普通の鶏と尾長鶏の2種類がいたと推測される。

韓国、慶州の天馬塚を発掘した時、壺の中から数十個の卵がみつかったし、新羅の古墳を発掘した時は、よく皿に盛られている鶏骨が出る。御陵の壺の中から鶏卵が出るのは、あの世の食糧として、または卵から生命が生まれることから宗教的な意味で副葬食糧として入れたものと解釈される。古墳から出る鶏骨も、死者があの世界に行って食べるように、生者が心から供えた物であったのだろう。皿の上に鶏骨があるから、鶏を料理して供えたものと解釈される。新羅人は鶏を好み、鶏肉や鶏卵を宗教的意味で、葬儀礼用として死者のそばに供えた。

百済の末期には、思いかけない異変が続いたが、義慈王の時の異変には鶏が登場する。

- ・太子宮雌鶏與小雀交媾（三国遺事，太宗春秋公）

鶏と雀が交媾する異変を説明したもので、鶏が広く飼育されたと考えられる。

高麗時代になると鶏の普及は広がり、儺礼儀の供養物として選ばれた。

- ・靖宗六年十一月戊寅…歳終儺礼 磔五鶏  
（高麗史志18 礼6冬季 大儺條）

儺礼は、歳末に家の中の鬼を追い払って、清らかで穢れない新年を迎えるための逐鬼行事の

ひとつで、主に宮中で行った。このような宗教儀式に、鶏を5羽もつぶして祭ったのである。宮中の大々的な儀式には多くの人たちが集まったので、大規模な時には牛を4頭も犠牲にしたこともあるが、後に鶏に代わったのである。

鶏に対する文化的、宗教的意味は後世に伝わり、生活面に反映するようになった。

動物としての鶏は、嘴が強いので、虫をついばんで食べるがよくある。蜈蚣は、鶏の前では食われないように縮まってしまう。伝説によると、汽車は蜈蚣の象徴なので、鶏の象徴である鶏龍山の麓を通る時には、よく故障したり、事故を起こしたりすると言われている。鶏龍山は大田から20km余りの所にあつて、その麓を湖南線が通っているが、よく列車事故を起こすのは鶏のためだそうである。このように、鶏は風水思想にも影響を与えた。

韓国では、鶏は雉に次ぐ吉鳥と思われている。諺にも「雉の代わりに鶏」とあり、雉が最も望ましいが、雉がない時には鶏を使って次善策とした。それで、鶏は儀礼や贈り物、料理、歌謡などによく現われる。

結婚式には必ず鶏を必要とした。新郎新婦が醮礼のテーブルをはさみ、向い合つて婚儀が行われるが、そのテーブルの上には青紅の風呂敷に包まれた鶏がおかれている。すなわち、鶏を供え、鶏を前に置いてお互いに一生の契りを結び、幸福に暮すことを誓うのである。結婚式がすむと、新婦と夫の両親や親族一同との初相見の儀が行われるが、この時にも幣帛の鶏肉が供えられている。結婚式は人生で最高にめでたい儀であり、その場に鶏が登場するのは、鶏がめでたい鳥として認められているからである。

めでたい時、喜ばしい時の贈り物は、鶏卵か若鶏であつた。新威の環曆の儀には、前もつて卵をかえして育てておいた若鶏を持っていくのが古い慣習であつたし、また、毎月のように卵を貯めて10個ずつセットにして贈り物にした。うれしい客が来ると、鶏をつぶして鶏料理で接待した。めでたい儀には、めでたい鶏や卵を贈るのが常例であつた。

正月には、大門に鶏の絵を貼つて魔除けにした。真夏には、若鶏に人参を入れて煮た鶏蔘湯や嬰鶏白熟を食べて夏負けしないようにすることが、年中行事になっている。皮も骨も黒い烏骨鶏は、衰弱した人を元気にするとされていて高級食である。正月の白餅のスープは、よく鶏湯で作られる。山の神への供養にも、鶏を犠牲にして供える。

巫儀の中で、水に溺れて死んだ人の魂がいる場所を捜すのに、鶏を川や湖水に流して、鶏が鳴くことでみつけ、死霊を慰める儀式を行うものがある。鶏の皿で赤く塗つて厄除けをすることもある。

民謡でも、鶏はよくうたわれている。

鶏よ鶏よ 鳴くなよ  
お前が鳴くと夜が明ける  
夜が明けると彼は去る  
離別は嫌なのです

鶏の鳴き声は、時刻を知らせる役目をした。暁の鳴き声は夜明けを告げるので、夜が明けると帰らなければならない恋人を引き止めるために、鶏が鳴かないようにと願う心を歌った民謡である。

暁の鶏鳴は鬼を追い払うと言われている。もうすぐ夜が明ける知らせなので、鬼も身を隠さねばならないし、猛獣たちも山に戻らねばならない。昔の人は、鶏の鳴き声を聞いて始めて安心して部屋から外に出たのである。

韓国の昔話に、若者が死んで雄鶏に生まれ変わった話がある。

昔々、大昔、ある所に、年老いた母親と二人暮らしの若者がいた。貧しい上に山奥に住んでいたの、誰も嫁に来るものがなかった。若者は、正直で親孝行者であった。

ある日、若者は山へ薪取りに出かけた。山で、猟師に追われる鹿に助けを求められ、若者は鹿を草むらに隠してやった。追って来た猟師には「鹿はむこうの谷間に逃げた」と嘘をついた。

助けられた鹿は、若者にこう言った。「命を助けてくれたので恩返しをします。これから山の中に入ると、金剛山の麓の湖のほとりに出ます。その湖は、天界から仙女たちが降りてきて水浴びをしますから、気に入った仙女の衣を隠して下さい。衣がないと再び天に昇ることができないので、その仙女を妻にして幸せに暮して下さい。ただし、子どもが3人できるまでは、衣を仙女に見せてはいけません。」

若者は鹿の言葉通り、山奥に入って行って湖のほとりに出た。しばらくすると、湖から七色の虹が天まで届いた。そして、美しい仙女たちが虹に乗って、滑るように降りてきた。仙女たちが衣を脱いで水浴びに夢中になっているとき、若者は、1番美しい仙女の衣を隠しておいた。

水浴びをすませた仙女たちは、衣を着て天に昇る準備をしたが、1人の仙女だけが衣がないので大騒ぎした。みんなで捜したがみつからず、虹が消え始めた。天と地の橋である虹が消えてしまうと天に昇れないので、仕方なく、衣のない仙女1人を残してみんな天に帰ってしまった。衣のない仙女は泣いた。

若者はその仙女を家に連れて帰り、幸福に暮らした。仙女は子どもを2人生んだ。ある日仙女は、衣をどこに隠したのか見せてくれと若者にせがんだ。鹿は若者に、子どもが3人できるまで見せてはならないと言っていたがもう2人できたから大丈夫だろうと思い、豆穀の束の中に隠しておいた衣を出して見せてやった。すると、仙女はその衣を着て2人の子どもを両脇に抱え、煙突を抜けて天に昇ってしまった。若者は、1人暮らしの悲しい日々を送った。

ある日、若者が山へ薪取りに行くと、昔出会った鹿が現われてこう言った。「なぜ言う通りにしなかったのですか。子どもが3人いれば、1人残して行くわけにはいかないので天に昇れないが、2人だから連れて行ってしまったのです。妻に会いたいなら、昔行った湖のほとりに行きなさい。仙女たちは、もう水浴びのために降りてこないで、湖から水を汲み上げて水浴びをします。水を汲み上げるツルベに乗って、天に昇りなさい。」

若者は湖のほとりで待った。やがて水汲みのツルベが降りてきたので、すばやくツルベに垂っ

て天に昇り、妻子をみつけてそこで幸福に暮した。

ところが、若者はだんだん老母のことが気になり出した。自分は幸せに暮しているものの、残してきた老母の生死もわからない。親不幸者になったことが、心苦しかった。若者は妻に何度も相談して、やっと了解を得て、白馬に乗って地上に降りることになった。妻は「この馬から降りて地上を1歩でも踏むと天界に再び戻れなくなりますから。」と、何度も注意した。若者は妻と、馬から降りないで必ず天に戻ることを約束した。

若者は自分の家に着いて、母を呼んだ。老いた母は喜んで、早く部屋に入れとせかした。しかし、若者は馬から降りず、その事情を話した。

老母は、せめて一晩だけでも泊まっていけと勧めたが、それもできない。ではご飯でも食べて行けと言ったが、若者はそれも断るので、母は、久しぶりに戻った我が子の無情さに怒り出した。そこで若者は、「では、おかゆを作って下さい」と頼んだ。熱いおかゆを馬に乗ったまま食べている時、しくじっておかゆをこぼしてしまった。すると背中をやけどした馬は驚いて跳び上がり、若者は地上にふり落とされた。白馬は長いいななきを残して天界に飛んで行った。

若者は再び天に戻る機会もなく、寂しいやもめ暮して人生を終えた。死んでから若者はあの世で雄鶏に生まれ変わったという。

雄鶏が鳴く時、塀の上や屋根など、高い所に上って長い首を天に向かって伸ばすのは、天上にいる妻子が恋しいからだと言う。

この昔話は仙女物語で、日本では羽衣伝説天人女房譚、中国では白鳥伝説といわれる民話と同型であるが、韓国では結論として、雄鶏は男の生まれ変わりとしたところに特徴がある。男と雄鶏は相関性を持っている。ある意味で、理想的な男性像は雄鶏型なので、死んだ男はあの世で雄鶏に生まれ変わるによって完成するという意味が含まれている。

韓国では、昔から鶏の三賢があった。①補妻子 ②守義理 ③知時刻である。

雄鶏が雌鶏とヒヨコを連れて餌を捜しまわる時、雄鶏は餌を発見すると自分が先に食べないで、雌鶏とヒヨコを呼んで餌を譲り、また悠然と新しい餌を捜し始める。これは、妻子を養う男性の姿である。人類の歴史を見ると、男は危険のある仕事を受け持つ勇気があったし、妻子が食べるのに困らないように食糧を生産し、獲得する義務があった。雄鶏は餌をみつけて妻子にいつも譲っているので、補妻子の典型的なモデルケースであった。

雄鶏は強い嘴と足を持っている。弱い鳥類でありながら、ヒヨコを連れていく時には、雌鶏でも犬や人から守るために立ち向かっていくことすらある。雄鶏は、隣家の雄鶏と会うと、攻撃体制になることがよくある。嘴でつつき、鶏冠を血みどろにしながら争う。勇気と気魂がある。雄鶏は家族を守り、家族を食べさせていくためには、縄張りを広げることが必要なので戦うのである。強い雄鶏は巣に戻って雌鶏やヒヨコをいじめたり、争ったりするようなことはしない。強い敵には立ち向っていくが、弱い雌鶏やヒヨコに対しては、おとなしく接するのである。これこそ真の勇気であり、家族を保護する義理である。雄鶏が外でするような争いを、帰ってからも同じようにすると、弱い雌鶏やヒヨコたちはたまったものではないだろう。

鶏の鳴き声は、時刻の知らせであった。祖先たちの生活史を見ると、時計のなかった昔には、昼は太陽を見て時刻を知ることができたが、真暗い夜になると時刻を知ることができなかった。そこで、夜は鶏が鳴くのを聞いて時刻を知ろうとした。一の鶏鳴、二の鶏鳴三の鳴鶏と、雄鶏は時刻に合わせて鳴いてくれたので、時報の機能を果たした。鶏は時計を持ってはいないが、正確に時刻に合わせて鳴く賢明があった。万物の靈長といばっている人間は、時刻の変化に鈍いが、鶏は正確であった。

時間の変化を知ることが、時代の変化、社会の変化、歴史の変化をも意味するもので、賢明な人や指導者には必要な能力である。また、時刻の正確さから信用する対象にもなった。

以上のように、鶏には、妻子を養い、勇気を持って家族を守り、時の流れを知る3つの能力があって、これらを三賢とした。この三賢は、韓国では男性に必須のものであり、三賢を備える人を理想的な男性像としている。その三賢の教訓が鶏に見い出されたので、鶏は巢なる食糧としての対象だけでなく、鶏を意味あるものとし、民俗の上でよく適用させたのである。若者が死後、あの世で転生して雄鶏になったのも、鶏の三賢に共鳴したからである。これで、鶏がめでたい席に登場したり、あの世の食糧として副葬されたのも理解できる。

産育習俗に関する鶏の民俗に次のようなものがある。

- ①毎月、月の数だけ鶏卵を食べると妊娠する。
- ②雄鶏の生殖器を煮て食べると、よく妊娠する。
- ③妊婦が鶏肉を食べると、生まれた子どもの皮膚が鶏の膚のようになるので嫌う。
- ④妊婦が鶏肉を食べると、足の指の間に膜を張った子を生む。
- ⑤妊婦が鶏肉を食べると、鶏のように足で蹴散らす癖のある子が生まれる。
- ⑥妊婦が鶏卵を食べると、生まれた子に腫れ物がよくできる。
- ⑦妊婦が鶏の骨を食べると、死後、身体のどこからか骨が突き出る。
- ⑧産後に鶏卵を食べると、子どもに腫れ物ができる。
- ⑨夜、鶏が鳴く時に出産すると、名をあげる人物になる。

鶏肉や卵は、肯定と否定の二面性で民俗化されている。鶏は栄養分が多いからよく食用とされたが、鶏の肌は荒れたようにカサカサしているので、子どもの肌、特に女兒の肌がそのようになるのは好まれない。禁忌される。卵は生命力があり、蘇生、復活の意味を内蔵していると思われた。食べた物の形質に似た子を生むと考える、類似感染呪術観の現われである。

### 3. 中国における鶏の民俗

中国では最近、河南省三門峡廟底溝から、紀元前2500年の竜山文化期の住居遺址が発掘され、鳥の骨が出土した。この骨は、研究の結果鶏の骨であることが判明し、馴化した家鶏であることがわかった。また、湖北省の揚子江流域、屈家嶺の発掘でも、竜山文化期の陶製の鶏が出土した。これから推測するとすでに紀元前2500年頃より鶏が飼育されていたことがわかる。殷墟からも出土した甲骨文字の中に鶏の字があったし、周時代より伝わる詩経の中にも鶏をうたった詩がある。

鶏が製陶されて美術品になったり、詩としてうたわれたことは、鶏が人間の心性の中に深く関わったことを意味し、中国での鶏の歴史の古さを物語っている。

中国は国土が広いので、鶏の種類もいろいろとあった。三才図会によると、蜀（四川省）の鶏は大きく、越（浙江省）の鶏は小さく、魯（山東省）の鶏はもっと大きかったと記録されている。

春秋戦国時代には養鶏業が発達していたし揚子江流域は、早くから鶏と鴨の産地であった。殷時代にできた十二支の中にも鶏を表す酉があることから、中国では五千年前の大昔から鶏となじんできたことがわかる。

韓国では鶏の三賢であるが、中国では鶏の五徳が早くから言われている。韓詩外伝に次のような記録がある。

魯哀公曰 君不見夫鶏乎 頭戴冠者文也 足搏距者武也 敵在前敢闘者勇也 見食相乎者仁也 守夜不失時者信也 夫是謂之五徳

鶏は文・武・勇・仁・信の五徳を備えているので、他の模範として称えられた。韓国の三賢にしる、中国の五徳にしる、理想的な男性像として早くから認められてきたのである。また、鶏は夜中に鳴くので、韓非子・揚叔篇では鶏夜司とも言った。王によく仕える后妃の内助を鶏鳴之助（詩経齊風鶏鳴篇）と言ったし、宮中で夜警を務める巡邏軍を鶏人（周礼春官）と言って、夜も眠らないで時刻を知らせる役目を果す鶏に例えている。

中国は歴史が古く、国土も広いので、鶏の民俗も多様で地方差がある。ここでは、正月の行事と産育習俗に現われている鶏の民俗をあげることにする。

- ①元旦には、接神のときに動物の声を真似るが、牛馬羊犬豚猫とともに鶏の声も真似るのは、家畜の繁殖を願うためである。
- ②新婚の新郎は、年初に妻の実家に年始あいさつに行くが、この時、四包の礼物を持っていくのが慣習になっている。四包のうち一包は、鶏蛋糕ときまっている。
- ③元旦には、お茶といっしょに鶏卵を煮て食べる。鶏卵をたくさん煮ておいて、年賀の客にあげるが、これを吉利という。中国語では鶏と吉が同じ音なので、混用したものと思われる。卵はめでたい時の食べ物である。
- ④年礼のために婿が妻の実家に来ると、御馳走を作ってもてなすが、よく鶏肉を出すことが多い。鶏湯という鶏のスープを勧められ鶏の腿の肉は婿が食べる特権を持っている。最も良い肉を食べさせるのは、良いもてなしをするという意味である。
- ⑤正月14日に、広東地方では鶏卜がある。鶏一羽と犬一匹を生きたまま神社に供え、様々な願い事を述べたあと、煮てから再び祭る。そして、鶏の両眼の上部の骨を取り出してこれを調べ、骨の割れ目の具合を見て占うのである。もし割れ目が人の形に似ていると、上上吉として喜ぶ。漁師や猟師たちの間で主として行われる。
- ⑥子どもが誕生した時や、結婚などのめでたい時には、必ず、卵の殻を取り中身を赤く染めたものをたくさん贈る慣習がある。この卵を喜蛋と言う。

赤く染めた喜蛋をもらった家では、家族の中で子どものない婦人に食べさせると子どもを生むようになると言われていた。鶏卵はめでたい呪術的な意味を持っているので、親戚や親友に贈ることが多い。

喜蛋は、赤く染めるだけでは物足らず、時には目的にかなう符咒を書いて神佛の壇に供えられたりもする。数日後、その卵を子のない婦人が食べると、非常に効果があると言われていた。

- ⑦結婚前に花嫁は、前額の毛髪を糸で抜き美しく見えるようにする。毛を抜いた後、穀を取ったゆで卵で額をなでて皮膚を整える。その卵を子のない婦人が食べると妊娠すると言われていた。
- ⑧子どもを出産して三日目の洗三の時にもゆで卵で子どもの顔面をなでる。これを滾臉蛋と言うが、この後卵を子のない婦人に食べさせる。
- ⑨出産後3日目の三朝、または6日目の六朝に、赤く染めた卵で天生婆婆を祭る。天生婆婆とは、娘娘神のように生産を司る女神である。子どものない婦人は、生産の女神を祭る間に、祭壇に供えてある紅蛋を盗んで食べると子が授かるという。
- ⑩北支地方では、碰頭蛋を食べると子をはらむと言われていた。碰頭蛋とは、甲が子を生んだ時に、乙からお祝いとして贈られた卵をひとつだけ失方の器に残し、そこに自分のうちの鶏卵をひとつ加えて返す、ふたつの卵のことである。両家の卵を合わせたので碰頭蛋と言った。碰頭蛋を産婦が食べると母乳がよく出ると言われる。
- ⑪子どもが生まれると、無病や長寿などを祈っているんな贈り物があるが、卵は欠くことのできない贈り物である。嫁が子どもを生んだという知らせを受けた岳家では、男の子が生まれた場合は雄鶏を、女の子の場合には雌鶏を贈る。産後の補養のために、当分の間は毎日のように鶏を一羽ずつ贈って妊婦に食べさせる。
- ⑫産婦への贈り物には、鶏、鶏卵、糲、米、砂糖などを贈るが、鶏は慈養分が多いので、三十日間は毎日一羽ずつ食べることもある。それで、里では鶏を三十羽ないしは六十羽添えることもある。
- ⑬鶏鳴関とは厄年のことでもあり、1、2歳の子どもが、突然鶏がけたたましく鳴いたのに驚いて病気になることも言う。鶏鳴関の時には、呪符や祈祷をして治さねばならない。(永尾竜蔵著 支那民俗誌)

荆楚歳時記によると、元旦には「鶏鳴により起きて、先ず庭で爆竹を鳴らし、悪鬼を払う（鶏鳴而起 先於庭前爆竹 以辟山臊惡鬼）」とあり、年の始めは鶏鳴によって始まることを指摘している。鶏画を戸上に貼り、雉子と赤豆七枚を吞んで瘟気を払ったりもした。正月1日は鶏、2日は狗、3日は羊、4日は猪、5日は牛、6日は馬、7日は人に例えられるが、この場合にも、鶏が1番前である。六畜のうち、鶏を先頭に出したのは、中国古代の礼俗であった。

神話によると、三千里に及ぶほど枝が伸びた大桃樹の上に金鶏がとまり、光を放ったという。元旦から7日間は毎日鶏を食べるというのも、鶏肉の栄養とうまさのためでもあるが、鶏を瑞鳥



とする考え方があったからであろう。

#### 4. 日本における鶏の民俗

古事記と日本書紀によると、天照大神は、弟の素戔鳴尊の所業に怒り、天石屋戸の中に隠れてしまい、天地が真暗になったという話が出てくる。暗黒の不便さに耐えられない神々が天安川辺に集まって協議した末、思兼命の発案により、常世の長鳴鳥を集めた長鳴きをさせるなどして解決したことが記録されている。この長鳴鳥とは鶏のことで、中国の礼記によると「鶏は翰音とあって註に翰は長なり鶏は鳴声長なり」とあるように、おそらく雄鶏であると先学達も解釈している。古事記 (A. D. 712) と日本書紀 (A. D. 720) は、8世紀初めの記録であるから、それ以前にすでに鶏は日本に入っていたものと思う。

天照大神を祭神としている伊勢神宮では、20年ごとに遷宮を行うが、この遷宮の儀式に鶏が鳴く真似をする神儀がある。神官が扇で自分の頭の冠を3度打ち、カケコー、と3度高らかに唱える。すると正殿の扉が開いて、神儀が進行するのだという。鶏の鳴き声が神儀の始まりを知らせることになる。時計のなかった古い時代には、韓国では祖先の忌祭を真夜中に行うので、鶏の鳴声で子の刻になったことを知り、歿祀を始めた。また、村集団の洞祭の時にも、鶏鳴を聞いて神儀を始めることが慣例になっていた。

大和時代には、三輪山の東北地方に鬮鶏（今は都郊）の国があったし、鶏足寺が播磨国の峰相山や近江国伊香郡、伊勢の亀山にあるなど、古くから鶏の名のついた地名や寺があった。

日本の神社の入口には、必ず鳥居が建ててある。文字からすると鳥がいる。すなわち鳥がとまる所であろうが、あまりにも大きいし立派なのでとても鳥が止まるようなものではない。筆者は、伊勢神宮や宇佐神宮、石上神社をはじめ、多くの古社では神鶏と神馬を飼っているのを拝見したことがある。鶏も馬も神に捧げるものであり、吉祥で良い動物という意味から聖域で飼われているに違いない。そうすると、鶏を神鳥とする思考から考えて鳥居はもとは鶏居、すなわち神鳥である鶏を止まらせるための構造物であったと思われる。多くの場合、鳥と鶏は同一視されてきたようである。

鶏が神として祭られているのは、筑前の鶏石神社だけであると言われているが、埼玉県北葛飾郡の鷲宮神社は鶏と関係が深く、12月の初酉日に祭儀があり、鶏のみごとな彫刻の構造物がある。庚申石塔にも、鶏が浮き彫りにされているし、絵馬にも鶏が多いことから日本の宗教や民間信仰にも鶏が潜在していることがわかる。

対馬の鶏知（一名、慶知、介知、桂知ともいう）では、地名の由来として次のような話が伝わっている。真夜中に、遠くから鶏の鳴き声が聞こえてきたので行ってみた。するとそこに村があったので、鶏が知らせてくれた村という意味で鶏知と名付けた。

日本でも鶏の三利五徳を言うが、五徳は中国でいう五徳をそのまま受け入れたものだ。三利については「本朝食鑑」に、「一に曰く山中の田家風雨の日は昼夜の時を知らせる。二に曰く場庭穀菽漏脱して土砂を混ぜるが、鶏はただ啄んで遣さない。三に曰く、多くの鶏を畜うなれば、す

なわち卵を生むもまた多い。故に時々市に販て不時の利を得る。これ三つのものは民間の貨である」とあり、鶏を飼って得る利点をあげている。確かに鶏は農民の良い収入になるので、ほとんどの農家では鶏を飼っていた。

鶏は肉がおいしいので、美食家の好む料理によくなるが、一方、鶏や卵を食べない場合もある。

鳥根県美保の関地方では、古くから鶏を飼わないし、卵も食べないことになっている。美保神社の祭神である事代主命が、美保津姫の住む輯屋へ舟で海を渡って行って、恋愛していたが、暁を告げる鶏の声を聞くと戻って来た。ある夜、鶏が誤って早く鳴いたためにあわてて舟を出し、途中でサメにかまれて障害者になったという。このような故事があって、鶏も卵も食べない禁忌が伝承されてきた。

大和の鬮鶏では鶏を食べなかったし、敦賀白木でも鶏を神聖視して食べなかった。また滋賀県の田村神社の氏子たちも卵を食べないと言われている。鶏を食べない理由には、神聖視と不吉視の二面があったようである。

日本では鶏の分類学が発達したせいか、種類が多い。地鶏、河内奴、鶉尾、鳥骨鶏、尾武、比内鶏、シャモ、チャボ、尾長鶏、唐九小国、黒柏、東天紅、声良、箕曳、地頭子、薩摩鶏の17種が天然記念物として指定されている。

東京の近郊、利根川沿岸では、水に溺れて死んだ人の屍体を捜す時に、鶏が使われている。鶏を舟か板に乗せて川に流してやると、屍体のある所に流れてきた時に、鶏が鳴くそうである。このようなことは、謡曲の中にもあると聞いている。鶏の霊感性を高く評価した民間信仰であろう。

瑞鳥としての鶏や、生産性を象徴する卵は産育俗に採用され、特に妊婦の食物として好まれ、一方では禁忌されている。

- ・鶏卵を食べると、鳥のように指の離れない子が生まれる。(群馬)
- ・鶏卵を食べると、動物に似た障害のある子が生まれる。(埼玉)
- ・鶏卵を食べると、八幡様のバチが当たる。(長野)
- ・生卵を食べると、白子が生まれる。(長野・山梨)
- ・卵を食べると、髪の毛の薄い子を産む。(長野)
- ・初卵を飲むと安産する。(岐阜・奈良)
- ・生卵を食べると腎臓炎に冒されるといって食禁する。(愛知)
- ・鶏卵の双子を食べると、双生児を産む。(岐阜)
- ・鶏卵を愛食する。(三重)
- ・鶏卵を食べることを忌む。(三重・長崎)
- ・卵を食べると、目のない子が生まれる。(和歌山)
- ・卵を多く食べると、色白の美児を産む。(和歌山)
- ・分娩後最初に生卵を食べると、もう二度と妊娠しない。(宮崎)
- ・鶏卵や鱗のない魚を食べると、はげ頭の子が生まれる。(鳥取・岡山)

- ・卵を食べると目鼻のない子を産むとって忌む。(広島)
- ・卵を食べると、生まれた子の頭が亀の頭に似る。(鹿児島)
- ・卵の殻を踏むと、子を産まない。(和歌山)
- ・卵の殻を踏むと、難産する。(兵庫・香川・福岡・熊本)
- ・鶏を食べると、4本指の子が生まれる。(奈良)
- ・鶏を食べると、一穴の子が生まれる。(栃木)
- ・鶏を食べると、足に水かきができる。(徳島)
- ・鶏を食べると丈夫や子を生む。(沖縄)
- ・妊娠2ヶ月内に鶏を食べると、鶏足の子が生まれる。(長崎)
- ・出産直前に生卵を3つくらい割って食べ、出産直後はゆで卵を食べる。(三重県)
- ・出産の徴候があると、生卵を飲ませる。(岐阜)

(母子愛育会編 日本産育習俗資料集成 昭和50年 第一法規社)

このように、鶏や卵を好むにしても嫌うにしても、鶏や卵が持っている機能を高く評価しているためである。

新しい生命が生まれる前後に、鶏や卵に関わる民俗が東北アジアに共通に現われているのは、文化の伝播から見ると面白い現象である。

## 5. 結び

動物の中で鶏は、早くから飼育馴化されたので、人間の生活とは密接なつながりを持っていた。

①古代において、人間が鶏を飼育するようになったのは、食糧のひとつとしての役割があったからである。肉がやわらかく栄養分があっおいしかった。それに、成鶏になると、毎日のように卵を産んでくれたので更に重要であった。古い時代から六畜が言われているが、西成羊猪牛馬で、その最初が西の鶏であるのは、人に対して害がない上に馴化しやすく、食糧としても重要であったからであろう。鶏がどこに行っても飼われているのはそれだけ需要があったことと、飼育しやすさがあったからである。鶏が普遍性を持つようになり、民俗として定着したとも言える。

②鶏は繁殖力が強かったので、需要に応じるだけの能力があった。春に孵化すると、もう冬になれば卵を産み始める。約3年間は、毎日とはいかなくても月に23個ぐらいいは産んでくれるので、農家の良い副収入になった。日本での三利はこれに値する。また、秋の祭りや親戚のお祝い、子どもの結婚に備えて春に孵化させたり、めでたい贈り物をするために毎日のように卵をためる。このような人間らしい誠実さを見せるのも、鶏卵を通して行われた。実利と人間性を高めるためにも効用があった。

③鶏は瑞鳥として認められた。めでたい時にはよく採用された。結婚祝いや幣帛の儀を始め、賓客の接待用として鶏を料理した。婿を迎えた時にも鶏の料理をたし、鶏の大腿部を食べる権利は婿にあった。これも、鶏は瑞鳥、吉鳥であったからである。年を迎えて鶏鳴を聞いたり、暁の鶏鳴を聞いて満足するのも、鶏の鳴き声で、瑞鳥、瑞声が思い浮かぶからである。

④鶏は霊力を持っていると考えられた。鶏は一定の時刻に間違いなく鳴いてくれるので信頼されたが、その鳴き声を聞いて、諸鬼や妖怪、山の猛獣もみな消え去ったのは、霊力があつたからであった。

巫女は死人の靈魂の居場所を探すのに鶏を利用した。年の始めに鍾馗と共に鶏の絵を描いて大門に貼ったのは、鶏が門番をしながら鬼たちの出入りを取り締まる役割をしていたのである。鶏にはそれだけの霊力があつた。

鶏や卵を食べることによって、新生児が鶏の本質に似ると言われているのも、鶏による類似感染呪術で、鶏の霊力の肯定である。

⑤鶏と卵の蘇生力である。特に卵において強調されている。卵は生命の縮小であり、強い生命力が内在していて、蘇生や創造が卵の中から創り出されると思われていた。

卵生説話では、英雄、聖人、豪傑などが卵から生まれるように構成されている。異常出生であるが、そうすることによって、生まれた人は神秘的で、なお特殊な人として認められた。産婦がお産の前後に卵を食べたり、赤く染めた紅喜脣を石女が食べることによって妊娠すると言われるのも、蘇生の霊力を認めているからである。墓の中に副葬品として鶏卵を入れたのは、あの世での蘇生を期待したからであろう。

⑥鶏の三賢や五徳は、古代人の鋭い観察力から生まれたものであり、動物であっても教訓とすべきものを持っていると認めて、人間への教訓として採用した例である。鶏を単なる動物として見ないで、その行動を観察し、ある意味では人間も鶏に学ぶべき事があることを認めた。三賢や五徳は、いつ、いかなる時代にも必須の教養であり、身につけるべき教訓であった。また、人間の理想像でもあつたので、早くから鶏を高く評価した。三賢の補妻子、保護の義理、時を知る能力や文、武、勇、仁、信の五徳は、誰もが必要とするものである。だから、未熟な人が死んであの世で雄鶏として転生するのは、完全な人を目指して一段と完全に近づく状況を説明したものであろう。

⑦以上のような考えから、鶏や卵は生活化され、民俗化されて、年中行事や産育俗などに広く適用されるようになった。年中行事とは、毎年、その時期その日時になると反復する周期行事である。1度で終わらないで毎年反復されるのは、それだけ意味が認められているからである。毎年繰り返しても飽きないし、必要性が切実に認められており、みんなと共に反復しなければならなかったからである。

産育俗でよく採用されるのも、それだけの必要性があるからである。人間がこの世に残すのは子孫である。自分の分身である子どもには、自分が果たせなかつた事を完成してもらいたいし、誰よりも立派に育ててほしいと願っている。それで、この切実な願いをかなえるために、胎教から始まって厳しいタブーを守ることにより、子孫への理想を実現しようと懇望するのである。このような人間の望みと行動は、国や民族を異にしながらも、民俗としての共通性、類似性を持つようになった。